

アクロス・ザ・ユニバース

2008(平成20)年7月2日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・原案=ジュリー・テイモア/出演=ジム・スタージェス/エヴァン・レイチェル・ウッド/ジョー・アンダーソン/デナ・ヒュークス/マーティン・ルーサー・マッコイ/T.V. カービオ (東北新社配給/2007年アメリカ映画/131分)

…… 60年代の珠玉のビートルズナンバー33曲が、その歌詞を大切に扱ったストーリーの中で紡がれていく。ジュードはリバプールから父親を訪ねてアメリカへ。しかし、アメリカではベトナム戦争が激化する中、若者たちは否応なくそれと向き合い、恋人たちは別れていくことに。『Hey Jude』の呼びかけから『All You Need Is Love』のクライマックスに至るシーンは圧巻。そんな変わった雰囲気ミュージカル映画をじっくりと楽しもう。

第4章

ザッツ・エンタテインメント

ビートルズの名曲で綴るミュージカルという趣向は……？

ブロードウェイ・ミュージカル『ライオン・キング』を演出したり、『フリーダ』(02年)などを監督した女性がジュリー・テイモア。そんな才能豊かな女性監督がこの映画でチャレンジしたのが、ビートルズの名曲で綴るミュージカルという変わったもの。

映画冒頭に歌われる『Girl』から始まり、ラスト近くの『Hey Jude』、そしてクライマックスの『All You Need Is Love』など、お馴染みのビートルズナンバーが登場し、その歌詞を大切にしながらストーリーが展開していくという趣向だ。もちろん、ビートルズが歌っている聴き慣れたオリジナル曲に比べると、同じ曲でもスクリーン上で歌われる曲のイメージは全然違うが、その美しさは同じ。また、字幕に表示される歌詞を見ていると、「なるほど、この曲はこんなテーマの歌だったのだ」とあらためて確認することができる。

ミュージカルは嫌いという人はこんな趣向に違和感があるだろうが、私はジュリー・テイモア監督のそんなチャレンジに大拍手！

60年代にふさわしい33曲を選曲！

ビートルズがデビューしたのは1962年。また、彼らが日本にやって来て大旋風を巻き起こしたのは1966年6月。私が大学の受験勉強に励んでいる真っ最中だ。

200曲以上あるビートルズの楽曲の中から、ジュリー・テイモア監督は33曲を選んだが、1960年代にふさわしいものというのが選曲の基準。プレスシートのプロダクションノートにあるジュリー・テイモア監督の言葉によると、それは「ビートルズのあらゆる歌に貫かれている“60年代の探訪”とでもいうべきものを映画にする構成が浮かんだ」ため。また、「ラブソングから政治的メッセージが込められた歌まで、音楽と映像は単に登場人物の日常を映し出すにとどまらず、この世界で起きている様々な出来事の縮図を表している」わけだ。

そんな難しいことを言わなくても、やはりビートルズが最も輝きを放っていた時代は60年代後半。また、歴史的に見ても、ベトナム戦争時代の60年代後半は激動の時代だから、若者を主人公としたビートルズの名曲で紡ぐストーリーをつくるには絶好の時代。そう考えれば、60年代にふさわしい曲が選ばれたのは当然！

主人公は？ 物語の核は？

そんな珠玉の33曲で綴られるストーリーの主人公は、1960年代にイギリスのリバプールの造船所で働く青年ジュード（ジム・スタージェス）。彼は米兵だったというまだ見たことのない父親を探してアメリカに渡り、プリンストン大学で管理人として働いている父親と出会うのだが、彼は父親としての愛情を示してくれないため、ジュードは戸惑うばかり。そんな中ジュードが知り合いになったのは、同世代の大学生マックス（ジョー・アンダーソン）とその妹のルーシー（エヴァン・レイチェル・ウッド）。ある意味で単純だが、以降ジュードとルーシーの恋の予感がストーリー構成の核となっていく。

主人公を取り巻く仲間たちは？

他方、自由を求める若い彼らがニューヨークで知り合うのが、歌手のセディ（ダイナ・ヒュークス）とギタリストのジョジョ（マーティン・ルーサー・マッコイ）、そしてチアリーダー仲間の少女に失恋してオハイオから出てきたブルーデンス（T.V.カ

ーピオ) たち。

セディとセディのバンドに加わったジョジョとの間にロマンスが生まれるが、こちらのロマンスの行方は……？ また、セディにはレコードレーベルのマネージャーから正式な契約のオファーがくるものの、これによってジョジョたちバンド仲間との軋轢も。さらに、マネージャーの誘いによって、ジュードはセディらと共にさまざまな音楽活動に加わり、幸せなひとときを過ごしていたが……？

ベトナム戦争時のアメリカは徴兵制！

7月10日に観た『アメリカばんざい— crazy as usual』(08年)は、貧困層が軍隊に志願する「貧困徴兵制」が大きなテーマだったが、アメリカが徴兵制を廃止したのは、ベトナム戦争の和平協定が成立した1973年1月。つまり、60年代後半ベトナム戦争の激しい時代のアメリカは徴兵制だったわけだ。

そんな中、マックスに徴兵通知が送られてくると、がぜんベトナム反戦運動にのめり込むようになったのがルーシー。そのため、ジュードとの間に大きなすきま風が吹きはじめ、遂にルーシーはジュードのアパートから出て行くことに。さらに、反戦を訴える学生デモが警察によって弾圧される中、ルーシーを助けようとしたジュードは乱闘に巻き込まれて逮捕。不法滞在者と見なされたジュードは、イギリスに強制送還されることに。

ビートルズは特に反戦ソングを歌ったわけではないが、60年代後半は若者たちにベトナム戦争反対の嵐が吹き荒れていた時代だから、こんなストーリー構成はきわめて自然なもの。そんな激動の時代を生きるジュードやルーシーやマックス、そしてセディやジョジョたちは、こんなストーリー展開の中、どんな場面で、どんな歌を、どのように歌うのか、それは是非あなた自身の目と耳で。

『Hey Jude』から『All You Need Is Love』まで一直線！

ビートルズ18枚目のシングルとして発売された『Hey Jude』は、私が大学2回生の頃アパートの部屋の中で、コード付の楽譜を見ながらたどどしくギターを弾きながらよく歌った思い出の曲。そんな曲がマックスから遠く離れたジュードに対して呼びかけるように歌われるのは、再び彼がルーシーを求めてリバプールからアメリカに向かおうとする時。つまり、『Hey Jude』をこのような場面で、このように使うために、



© 2007 Revolution Studios Distribution Company, LLC. All Rights Reserved.

ジュリー・テイモア監督は主人公の名前をジュードにしたわけだ。

そして、クライマックスで歌われるのは『All You Need Is Love』だが、これはベトナム戦争が激化していた時期の1967年、15枚目のシングル曲だ。この「愛こそすべて」というメッセージが高らかに歌われるのは屋上ライブ。そこに乗り込んできた警察官によって屋上ライブは中止させられてしまうが、なぜかその直後、リバプールから戻ってきたジュードが登場。そして、ジュードがマイクの前で再び歌い始める『All You Need Is Love』の声に惹かれるようにルーシーの姿が……。ここに、何とも感動的なクライマックスシーンが完成するわけだが、それにしても、歌い方によってこんなに曲のイメージが変化するのかと感心！

あらためてビートルズを聴き直さなければ

ビートルズの曲としては、前述した『Girl』『Hey Jude』『All You Need Is Love』の他、『I Want To Hold Your Hand (抱きしめたい)』『Let It Be』『Come Together』などはよく知っている。しかし、この映画のタイトルとなっている『Across The Universe』もちゃんと知らなかったし、意外と知らない曲が多いのにビックリ。あらためてビートルズを聴き直さなければ……。

2008(平成20)年7月12日記